

平成22年度
広島市教育センター

幼児の自己肯定感をはぐくむための 教師の幼児理解と援助に関する研究

—遊びにおけるA児の行動や内面の見取りを通して—

広島市立瀬野幼稚園教諭 杖本豊美

研究の要約

幼児の自己肯定感をはぐくむためには、幼児一人一人の実態を把握し、実態に応じた援助が大切である。しかし、自己表現が十分でない幼児については、その実態が見えにくく、実態に応じた対応ができないことで自己肯定感をもちたせることが難しいことがある。

そこで本研究では、幼児が自己肯定感をはぐくむためにはどのような教師の幼児理解と援助をすればよいか、研究保育とその分析により探っていくこととした。その際、幼児の行動や内面の理解を通じた「幼児の見取り表」を作成し活用した。

その結果、内面に即した教師の幼児理解と援助を行ったことで幼児の自己肯定感がはぐくまれたと考える。また、保育リフレクションを通して、他の教職員と共に保育を振り返ることで、多くの目で幼児を捉え、幼児理解や援助について深めることできた。

キーワード：自己肯定感 幼児理解 幼児の見取り表

I 問題の所在

1 社会的背景

文部科学省の子どもの徳育の充実に向けたあり方について報告¹⁾では、子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題として、乳幼児期には次の5点が挙げられている。

- (1) 愛着の形成
- (2) 人に対する基本的信頼感の獲得
- (3) 基本的生活習慣の形成
- (4) 十分な自己の発揮と他者の受容による自己肯定感の獲得
- (5) 道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実

本研究では、幼児期の課題として挙げられた(4)の幼児の自己肯定感に視点を当て研究を進めていくことが大事であると考え。

2 「幼稚園教育要領」の位置付け

「幼稚園教育要領」では、「幼児期における教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」と述べている。また、幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成するように」と定義されている。

領域『人間関係』の内容の取扱いの中にも「幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること」と定義されている。

このように、人間形成の基礎として、自己肯定感をはぐくむことは、大切なことと考える。

3 「幼児理解と評価」の中で

¹⁾ 文部科学省ホームページの政策について>審議会情報>調査研究協力者会議(初等中等教育)>子どもの徳育に関する懇談会>子どもの徳育の充実に向けたあり方について報告 2009年9月11日

また、幼児の行動から内面を理解することによってどのような発達がなされているかを読み取ることの必要性が書かれている。

さらには、表面に現れた幼児の言葉や行動から、幼児の内面を理解することは、幼児の心を育てることを重視する幼稚園教育にとって欠くことのできないものであると書かれている。

このようなことから、本研究では、教師が幼児の内面を理解することを通して、幼児の自己肯定感をはぐくむための教師の幼児理解と援助について追究することとした。

II 研究の目的

4歳児の遊びの場面において、幼児の実態に応じて教師が幼児理解と援助を行うことによる幼児の自己肯定感の高まりを探る

III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 研究保育の計画
- 3 研究保育の実施
- 4 研究保育の結果の分析・考察

IV 研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 自己肯定感について

自分に対する評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める感情とし、人間が外界や他者と力強く関わる主体となるための心理的土台である。²⁾

(2) 幼児理解について

²⁾ 『自尊感情や自己肯定感に関する研究』東京都教職員センター 2009年 5頁

幼児を理解するとは一人一人の幼児と直接触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しつつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとするを指している。そのためには、安易に分かったと思いきなり、この子はこうだと決め付けたりしてしまうのではなく、幼児と生活を共にしながら「・・・らしい」「・・・ではないか」など、表面に表れた行動から内面を推し量ってみることや、内面に沿っていこうとする姿勢が大切である。³⁾

(3) 幼児の見取り表の作成について

図1『遊びの中の自我形成の学習システム』を基本に、『幼児理解と評価』（文部科学省2010年）を参考に教師の援助の考え方を加え『幼児の見取り表』を作成した。

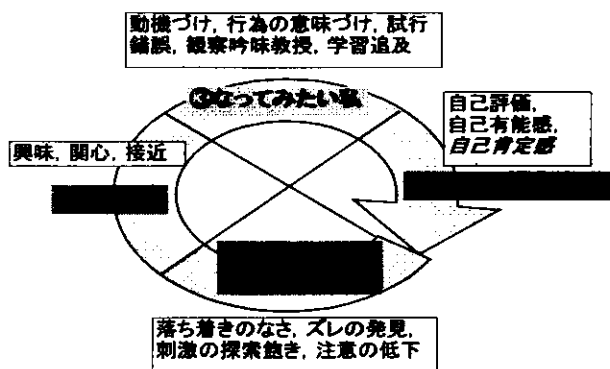


図1 「遊びの中の自我形成の学習システム」⁴⁾

2 研究保育の計画・実施

(1) 研究保育の指導計画（T2として参加）

広島市立A幼稚園4歳児B組（26名）を対象に、指導計画を作成し、平成23年1月7日～1月26日に研究保育を行うこととした。

(2) A児の姿

ア A児は、自己表出や自己表現が少ないため、A児の困り感やA児の思いに教師や友達も気付く

ことが少なく、次のような姿が見られる幼児である。

イ 困ったことがあっても、自分から助けを求めたり、表情に出したりすることが少ないので、周囲が気付かないことがある。

ウ 一斉に活動する場面では活動内容を十分に理解していないことが多く、その場に立ちつくしたり、うろうろしたり、泣いたりすることがある。

エ 新しい遊びを自分からやろうとすることは少ないが、砂場やスケートなど、自分の興味のある遊びについては、繰り返し楽しむことができる。

オ 気の合う幼児1名と一緒にいることが多いが、他の幼児と遊ぶ機会が増えつつある。

カ 全体（学年・クラス）での活動では、楽しさが十分味わえない時もあるが、好きな遊びの場面では、自分なりに遊びを楽しむことができる。短縄跳びなどができはじめ、担任に「見て、見て。」と言うことがある。

(3) 指導に当たって

幼児の実態を、表1『幼児の見取り表』の幼児の姿と照らし合わせ、それに応じた教師の援助の考え方を重視し具体的な援助を行う。

(4) 見取り表の活用

幼児の見取り表の活用では、幼児の実態・幼児理解・教師の援助・保育の振り返りというサイクルの中、色々な場面で幼児の見取り表を活用する。（図2）

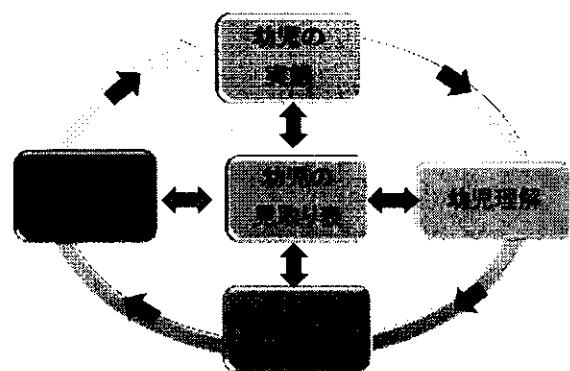


図2 幼児の見取り表の活用

(5) 教師が振り返りを共有するための工夫

ア 保育記録・エピソード記述

³⁾ 『幼児理解と評価』 文部科学省 2010年 8頁

⁴⁾ 小田豊・菅野信夫著『保育がみえる 子どもがわかる』ひかりのくに 1997年 121頁

イ 保育リフレクション

幼児一人一人に対する理解を深めるためには、互いに支え合い学び合う教師の姿勢が重要である。教師一人一人が参加関与し、保育を振り返り保育のねらいや問題意識を共有することで幼児理解が深められる。

教師が他の教師と様々に協働する場面を通して他の教師と自分の視点との違いに気づき、そこから自分自身の幼児に対する理解や幼児とのかわりを振り返ることが重要である。⁵⁾

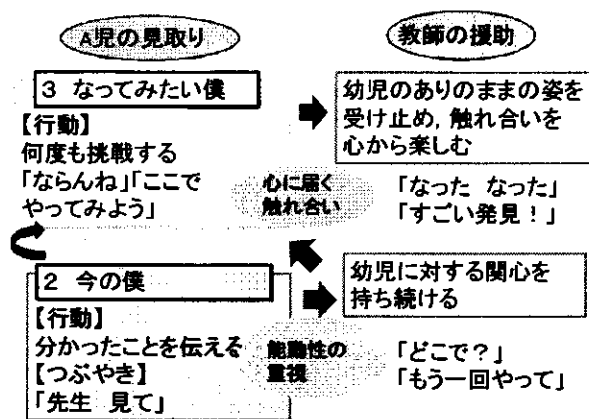


図3 事例1

3 研究の分析・考察

(1) 研究保育の分析方法

ア 目的

研究保育をビデオカメラで撮影し「幼児の見取り表」(表1)をもとにA児の自己肯定感の高まりの様子を見取り、教師の援助について分析・考察する。

イ 対象 4歳児 抽出児(A児)

ウ 分析方法

(ア) 抽出児(A児)のねらいを具体的な行動で分類しA児がどの段階であるかを捉える。

(イ) A児への援助の視点

(ウ) VTRから「幼児・周りの幼児の様子、教師T2の援助、考察」の記録を作成する。それを基に幼児の言動を分析し、考察する。

(2) 抽出児A児を通して

ア 事例1 「先生 見て。」

A児がスケーターに乗って走っている際、車輪が砂に当たることに気づき、教師に「先生見て。」と言った場面である。2の段階と捉えた。A児の言動に「どこで。」「もう一回やって。」と寄り添ってA児に関心をもちかかわっていった。

すると3の段階に上がり、A児は「できないね。」「やってみよう。」と何度も挑戦する姿となった。

教師は幼児のありのままの姿を受け止め、触れ合いを心から楽しむ援助をした。

その日、VTRを見て、保育リフレクションを行った。非常にわかりにくい場面と予想された。一人の教師は「A児は、何をしたかわからない。」というような正直な内容をつぶやいていた。

初めての保育リフレクションでプロンプターとしての自分の役割にも課題を感じた。しかし、別の日、教師はA児と共にスケーターに乗り、A児の楽しさを共感していた。保育リフレクションの意義を強く感じた。

この活動の後、帰る時間になった。片付けをして入室し、帰りの会があった。意欲的に片付けをする姿を4の段階に上がったと見取り自己肯定感がはぐくまれたであろうと捉えた。

先程の経験から、A児は、スケーターの数を確認し、最後まで片付けをした。それに対して、教師は、幼児ができたこと、変わったことを本人が自覚できるように言葉で伝えた。すると、A児は部屋までスキップで帰っていった。その後、帰りの会の振り返りの場面で、最初からA児が手を挙げていた。

指名されたA児は身振り手振りで発表した。A児の発表を、周りの幼児や教師が共感し、受け止めてくれたことで、A児が認められる場になったと思われる。教師は友達からの共感や子どもと子どもをつなぐ援助を心がけた。見取り表では、心に届く触れ合いや達成感への共感といった援助が有効的であったと考えられる。

⁵⁾ 『幼児理解と評価』文部科学省 2010

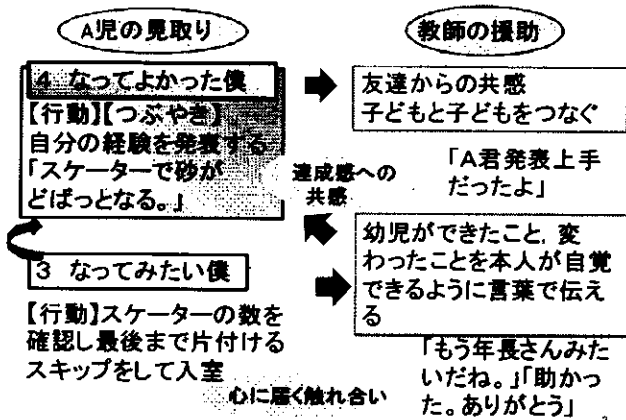


図4 事例1

イ 事例2

事例2では、見取り表の2の段階から、教師の援助のずれで、一度 1の段階に落ちたことが見取れた。その後、他の教師が加わり、A児の内面に即した教師の援助が行われたことで、再度2の段階に上がったと捉えた事例である。

B児が折り紙で作ったボールを3個作った。最近よく遊んでいる友達3人にあげたかったようだ。2人は受け取ってくれたが、最後にA児にあげようと思ったが、A児が困った表情で「いらいな。」と言った。

そこにかかわったC教師は、日頃からB児のことが気になっていた。そのB児が困っていたので、C教師はA児に「A君にあげようとしていたものだから、もらうだけでももらってくれないかな。」と言った。するとA児は、泣き出した。2の段階のA児であったが、教師の援助はA児の内面に即した援助ではなかった為、1の段階に下がったと考えられる。

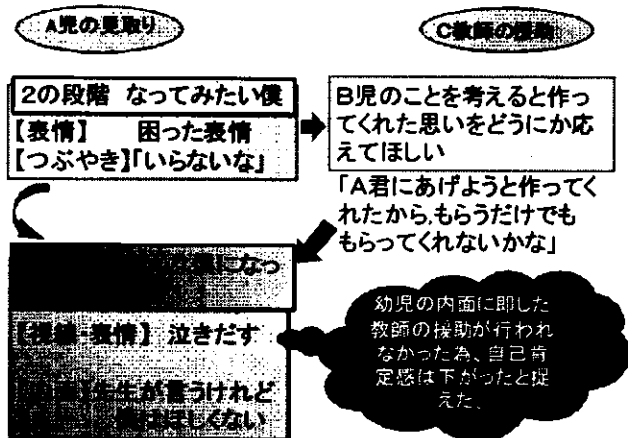


図5 事例2

1の段階のA児の泣き声に気付いて私も傍に行った。様子がわかり、A児の気持ちを推測し「A君はほしくないんだ。」「もらったらどうやって使うか困るのかな。」とも聞いた。A児は、「うん。」とうなずいた。

徐々に泣き止み、「いらいな。」ともう一度言う姿からA児は2段階にまたもどったと捉えた。「『いらいな。』と言えたね。」とA児の言動を成長として受け止めた。

肯定的に見る援助の考え方や「これでよい。」という援助が有効的であったと考えられる。

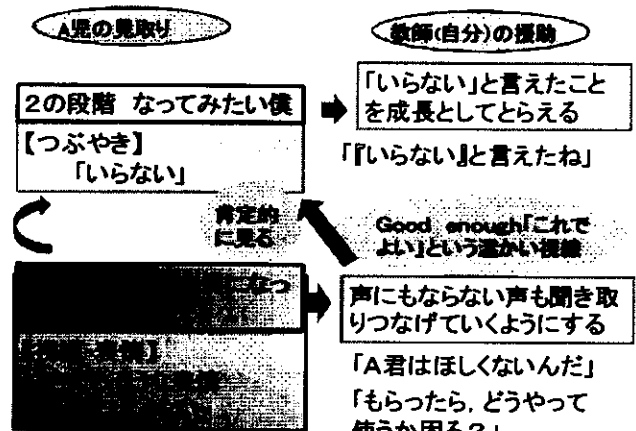


図6 事例2

C教師は、すぐに記録を書いて、自分も振り返りを記録に残し、保育リフレクションを行った。非常に難しい事例であると捉えた。

C教師は、「自分は、どちらかというともB児の思いばかりを代弁した援助であった。他の教師がA児とかかわる様子を見て、初めてA児の思いを忘れていたことに気付いた。」と振り返りを伝えてくれた。

どの子も同じくらい大事であることを再認識した事例である。

幼稚園は一人の教師だけでなく、多くの教師が一人の幼児にかかわったり、援助したりする場面がある。共に学ぶ姿勢が質の高い保育をめざす自分たちには求められている。

改めて、ありのままの幼児の成長を認める大切さを学んだ。

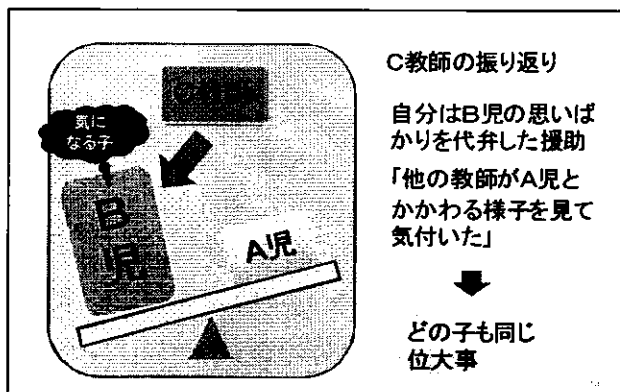


図7 他の教員との保育リフレクション

(3) 成果と課題

ア 成果

(7) A児の変容

幼児の見取り表を通して、内面に即した教師の幼児理解と援助を行っていったことで幼児の自己肯定感がはぐくまれたと考えられる。

A児は、自分を伸び伸びと発揮するようになってきた。「うれしい。」「楽しい。」などのポジティブな感情だけでなく「悲しい。」「嫌だ。」など、ネガティブな感情も表現できるようになってきた。友達の広がりも見られはじめた。

一輪車やあやとりなど、今まで挑戦しなかった遊びにも自分から挑戦し、4の段階の達成感を味わう姿が多く見られるようになったと捉える。

(4) 教師の変容

幼児理解が深まり、幼児をより肯定的に見ることができるようになった。

また、幼児の発達をよりの確に捉えようとする意識が高まったと考えられる。

(7) 相乗効果

A児と教師の変容には幼児の見取り表と保育リフレクションの相乗効果があったと考えられる。

イ 課題

(7) 見取り表の活用をしていると、幼児のネガティブな感情や子どもと子どもをつなぐ援助についての表記を加え、再構成することが必要である。

(4) 保育リフレクションのプロンプターの役割やVTRの効果的な活用についてよりよい検討が必要である。

V 研究のまとめ

幼児の内面を理解するためには、教師が身体全体で幼児に触れ、その思いや気持ちを丁寧に感じ取ろうとする姿勢をもつことが大切であることが分かった。教師自身の枠組みに当てはめて、決めつけないことが大事であり、幼児の気持ちに少しでも近づいていきたいと考える。

また、保育リフレクションを通して、他の教職員と共に、保育を振り返ることで、多くの目で幼児を捉え、幼児理解や援助について、深く考えることできた。

今後は、本研究の成果をもとに、幼児の見取り表の再構成をし、課題となった保育リフレクションのプロンプターの役割やVTRの活用についても追究していきたい。

参考文献

- ① 小田豊・菅野信夫編著『保育がみえる子どもがわかる』ひかりのくに株式会社、1997年
- ② 鯨岡駿著『保育・主体として育てる営み』株式会社ミネルヴァ書房、2010年
- ③ 大河原美以著『怒りをコントロールできない子の理解と援助』金子書房、2006年
- ④ 小田豊・青井倫子編著『幼児教育の方法』北大路書房、2009年
- ⑤ 『幼児理解と評価』文部科学省、2010年